住民の皆さまへ

ホンモノの支え合いを意識しましょう!

ご近所福祉クリエイション　主宰
ご近所福祉クリエーター　酒井 保さん

そもそも「支え合い」とは何でしょうか。ふれあいサロンの数や見守り活動の頻度、行政などからの援助で実施している事業の数が、支え合いの基準になってはいませんか?　本来、支え合いとは地域住民のなかから醸成されるべきもので、事業として推進されるものではなかったはずです。いまの時代はプライバシーというものが、その条件を阻害しているため、本来の「支え合い」が醸成されにくくなったのだと思います。

お互いの暮らしの様子がダダ漏れだった時代には、見たくなくても見える、聞きたくなくても聞こえる隣の暮らしの様子が「気になり」、「放っておけない!」という行動への起爆剤となりました。お互いに干渉し合うことがタブーとなったいまの時代、「気になる」という感情は生まれにくい。だから、わざわざ「ふれあいサロン」や「見守り活動」を事業として立ち上げ、「気になる」感情を揺さぶり合わなければ、“支え合い”が醸成されにくくなったということなのでしょうか。

そんな疑問を払しょくする活動に出会いました。それは、福島県郡山市の『駒板おさんぽ会』という、年配の女性4人が毎日決まった時間に集まって、犬の散歩をしているだけという活動。(DVDでご覧いただけます。詳しくは下面を参照下さい)。ただ犬を散歩させているだけの、女性4人の日課ですが、この日常にはホンモノの支え合いを醸成させていくドラマが潜んでいました。たとえば「4人のうち1人が時間になってもこない」という状況があれば、「気になるから様子を見に行こう」と、3人がその人の家を訪ねます。「あれ?風邪ひいて寝てんのか?じゃあ、代わりに犬を散歩に連れてってやっからな」という展開になります。散歩から帰れば、「食欲ある?お昼には、お粥をこしらえて持ってきてやっから。なんか、いるもんがあったら買ってきてやろうか?」と気遣う言葉がかけられます。これこそが、ホンモノの支え合いであり、いまの時代に私たちが欲している「向こう三軒両隣」ではないか?!この価値を共有していくことに大きな意味があると思います。

人が集まる日常には、集まった同士が「気になる」という感情を揺さぶり合っています。そこからホンモノの支え合いが醸成されていく。事業としての支え合いも必要ですが、それだけを支え合いの指標としていいのでしょうか?

「見守り活動とは言わない、見守り活動」「ふれあいサロンとは言わない、ふれあいサロン」は、地域のあちこちに潜んでいます。それに気づいて、「これこそたいせつな活動だね」と認め合うことが、より暮らしやすい地域づくりにつながります。

まとめ

絆を活かす、住民の地域支え合い活動

「山元町における地域コミュニティ・支え合い活動推進事業」実行委員会委員長
(東北福祉大学 教授)　髙橋 誠一さん

被災地では、地域コミュニティの再構築や、災害公営住宅の入居者のように大挙して転居せざるを得なかった人たちの新たな絆づくりのために、さらには生きがいや役割づくり、見守りをも視野に入れた、さまざまなサロンやつどいの場、地域の支え合い活動などが育まれています。これらは、被災以後に新たに生まれたものもあれば、以前から地域でのつながりを維持・形成するものとして意識せずに継続されてきたものも含まれます。

往々にして、自然発生的に始められたこれらの活動は、地域の住民にとっては当たり前すぎて、特に主張する場もないため、行政などには見えていない場合が大半です。また、日常生活におけるその重要性を住民自身も特別に認識していないことから、コミュニティ力が弱まっている地域では、そのような活動がまさに風前の灯の状態であることも少なくありません。これは、地域の伝統文化や芸能などにも通じます。

このような、被災地における地域コミュニティの存続や新たな関係づくりに寄与・貢献している多様な住民の支え合い活動に着目し、これらを発掘して「見える化」を図ることは、地域住民の暮らしに根づいた活動の意義を意識化させ、活動への自信や継続に向けたモチベーションの向上につながります。人口減少、少子高齢化の社会において、このような取り組みは被災の有無にかかわらず求められており、山元町から広く波及していくことを期待します。

平成28年度宮城県NPO等の絆力を活かした震災復興支援事業
「山元町における地域コミュニティ・支え合い活動推進事業」

山元町住民支え合いガイドブック

23行政区のお宝自慢

宮城県山元町
特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター
お問い合わせ先:山元町地域包括支援センター　TEL 0223-37-3901